

スポーツ健康福祉学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

スポーツ健康福祉学科の回答率は34.9%と回答率が低い結果であった。回答性別は80%以上が男子学生で女子学生は17.3%であり、学科の特徴として男子が多い。通学手段は、78.9%の学生がバイクあるいは車で通学しており、85%以上の学生は通学時間が30分以内の場所に住んでいる結果であった。一方で若干ではあるが電車・バス両方を利用している学生、通学時間が60分以上かかる学生もいた。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルの中心がクラブ、サークル活動とする学生が半数を占めていることが他学科に比べて特徴的である。活動頻度で最も多いのが週に4～6回で、ほぼ毎日活動していることになる。一方、アルバイトは週に1～3回の学生が60%近くおり、講義以外の活動が活発に行われている。

入学前後の大学のイメージの変化では、約60%の学生が変わらないとし、良くなったが21%である一方で、17.3%が悪くなったと答えている。今後、どう悪くなったのか具体的に調査する必要があると考える。反対に良くなった要因も知り、それらを参考にすることが必要である。キャンパス内で過ごしている場所は、講義棟、食堂、図書館などで過ごしている。休暇中の過ごし方は、複数解答ではあるが、60%程度がアルバイトを行い、サークル、クラブ活動等に参加している学生はそれらへ参加している。一方で、30%以上が帰省している。学費の工面では60%以上が奨学金を利用し、親、親戚からの援助も50%以上いる。約70%の学生が一人暮らしをしている。生活費の工面では、家族、親族との同居、一人暮らしとも70%以上がアルバイトから生活費を得ている。60%程度の学生が好きな講義・実習が2～4つあるが、なしと答えた学生が23%いた。大学生活での悩みは、進路や就職のことで、次いで勉強や成績のことであった。悩みを相談する相手として友人が最も多い。また先輩に相談するが26.9%と他の学科より多く、これはサークル・クラブ活動での先輩とも考えられる。休学あるいは退学をしたいと考えたことがあるかでは、どちらも21.2%があると答えている。休学をしたいと考えた理由は「その他」が最も多く、具体的な理由が何か解らない結果であったことから支援の為に具体的に調べる必要があると考える。退学を考えた理由は「学力の問題」以外のすべてに一人以上いる結果であった。

「自主学習について」設問 27～29

平日の勉強時間で最も多いのは、30分未満の30.8%で、0時間以上が17.3%の結果であった。休日も同様で、30分未満32.7%、0時間が15.4%である。シラバスに書かれている予習・復習の認知については、約30%の学生が知らないと回答している。

「学科としての対応・改善策」

多くの学生が一人暮らしをしており、サークルやクラブ活動やアルバイトを行っている学生が多いことから、生活状況や交友関係など様々な側面を学科教員間で共有し、充実した学生生活を送れるよう支援していく必要がある。約15%以上の学生が自主学習を行っていない現状が明らかになった。資格取得や採用試験の合格には、近々の学年だけでなく、早い段階からの学習習慣の定着を促す必要がある。また、シラバス上での予習・復習の記載を認知していない学生が他学科に比べ若干多いことから、オリエンテーション時だけでなく授業時にも積極的にシラバスの確認を促す必要があると考える。

臨床福祉学科 <アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策>

「プロフィール」設問 1～5

回収率は36.1% (52名/144名)である。1・2年生が67.3%を占め、4年生は9.6%と回答にばらつきがある。通学手段(問4)は自動車(38.5%)、バイク(21.2%)、バス(15.4%)の順で比率が高く、他学科に比べて自転車(11.5%)がやや高い。通学時間(問5)は30分以内が6割を占め、それに次ぐ60分未満(28.8%)は本学では最も高い。これには自転車通学の多さも起因していると考えられる。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活の中心(問6)は、アルバイト(42.3%)とゲーム(11.5%)であり、前者は学内2番目、後者は学内1番目の比率の高さである。一方、学内自習(5.8%)、クラブ活動(3.8%)、自宅自習(7.7%)は他学科より低い。アルバイトの頻度(問8)は、週1～3回(30.8%)、週4～6回(25.0%)で約6割を占め、アルバイトをしている者で比率を再集計すると、前者は53.3%、後者は43.3%となり、半数が週の大半でアルバイトをしている。学内での居場所(問10)は、食堂(36.5%)と講義室(26.9%)が中心であるが、ロビーやホールの比率が他学科よりも高い。入学前後の本学のイメージ(問9)は、変わらない59.6%を占めるが、他学科に比べて良くなった(21.2%)の比率が高い。現在の世帯状況(問13)は、約半数(46.2%)が家族等との同居しており、本学で最も比率が高い。また、学費の工面(問15)は親等からの援助に加えて、半数近く(同居59.3%、一人暮らし45.0%)がアルバイトで工面している。大学生活の悩み(問19)は、進路や就職のこと(44.2%)、勉強や成績のこと(38.5%)、友人関係(34.6%)、経済的問題(30.8%)などの比率が高く、相談相手(問20)は、友達(61.5%)が最も多く、身内(38.5%)、チューター教員(34.6%)とつづく。とくにチューターは本学では最も比率が高い。休学または休学を検討する者(問21)は25%あり、その理由は心身の問題である。また、退学を検討する者(問25)は13.5%あり、心身の問題のほか、経済的問題と進路に疑問を挙げている。

「自主学習について」設問 27～29

平日の学習時間(問27)は60分未満が34.6%、30分未満が30.8%であり、0時間が17.3%ある。また、休日(問28)も同様の傾向がある。シラバスの記載内容(問29)は67.3%が認知していた。

「学科としての対応・改善策」

本学科学生の特徴として、①自宅生が多く生活費の工面としてアルバイトをする者が多い、②ゲームをして過ごす者の比率が高い、③学習時間が60分未満の比率が8割を超え全学でもっとも比率が高い点が挙げられる。ゲームをする時間については社会的問題として指摘されており、また、経済的事情を踏まえるとアルバイトの規制は難しいが、学内にいる時間または自宅での自由時間に少しでも学習時間を高める工夫が必要である。大学ではロビーやホールの利用率が高いことから、少人数で集まれる空間を準備することで、学生相互の団らんや教員との交流のほか、学習スペースとして活用して学内学習の向上でつなげられるのではないだろうか。演習室等の利用について検討していきたい。福祉職養成の学科であるが進路の悩みが多い。また、約1/4の学生が休学を検討しているのは緊急の解決課題である。本学科はチューターと相談しやすい環境にあるといえるので、学科教員を通じて卒業生との交流等を企画し、進路や学習相談をする機会も検討する。また、心身の問題は本人だけでなく保護者と連携して対応することが必要である。本人や家族との同意のもとで、学科教員間、授業担当者との連携も求められる。情報共有のあり方を検討したい。学科のイメージが向上した者の比率は全学的には高いものの2割に止まる。上記の悩みや相談に丁寧に対応することで学生の満足度の向上につながると考えられる。担当学生に限らず、各教員が学科学生一人ひとりに声をかけてあげるよう心がける。

作業療法学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回収率は83.0%である。通学手段は自動車が42.5%と最も多く、ついでバイクが26.0%である。各年次で学外臨床実習があり、その交通手段としての必要性からだと考える。通学時間は30分以内が82.2%であり、延岡市内の実家およびアパート住まいが多いためと考える。60分以上が11.0%あるが、これは日向市や杵築市などからの自宅通学のためである。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルではアルバイトが27.4%と最多だが、比率としてはそれほど多くない。図書館を含む学内自習は16.4%と他学科に比べると低い。この質問(6)については、「講義以外の・・・」という設問が曖昧で、これを登校日以外と捉える学生と講義の入っていない時限と捉える学生がいるかもしれない。アルバイトは全くしていないとしても週1から3回が38.4%と同値である。本学のイメージについては悪くなったが27.4%と多く、これは問題である。休日の過ごし方では、アルバイトが46.6%と最も高いが、学費に対する必要度は20.5%でありアルバイトの目的が学費以外であることが考えられる。好きな講義は「なし」が52.1%と学内で二番目に高い。悩みは友人関係が20.5%だが、SNSを通じた軽い陰口やマウントの取り合いなどに起因することが多いのが近年の傾向である。悩みの相談相手は友人が54.8%、家族などの身内が35.6%であり、チューターは24.7%でしかない。休学の念慮は30.1%とかなり高く、その理由は勉学意欲喪失が18.2%、心身問題が13.6%である。退学の念慮は27.4%と学内で最も高く、その理由は勉学意欲の喪失35.0%である。

「自主学習について」設問 27～29

ホームワークは30～60分が42.5%であり、0分を含めた30分未満が37.6%である。これらを合計した80.1%について、週に2本程度のレポート課題のための時間を割り引けば、事実上のホームワーク時間はほぼないに等しい。

「学科としての対応・改善策」

勉学意欲の喪失：本学のイメージが悪くなったことや好きな講義はないとの回答が多かったこと、更には休学や退学の念慮が高かったことは、勉学意欲の喪失に基づいているのではないかと考える。基礎学力不足や高校までの間に勉強をしたことがないといった学生が年々増えてきている。1年次はまだしも、2年次になると専門科目が多くなり、3年次ではその難易度はかなり高くなる。1年次の段階で勉学ペースを逸してしまった学生にとって、その後の年次の勉学は困難なものになってしまう。ホームルームでの自己学習時間などを取り入れて、学力向上のための対応を進めている。しかし最も重要なのは自宅での自主学習を増加させることにある。独自のワークブックを作成している教員もいるが、今後はこのような具体策をさらに実施する必要があるかもしれない。

言語聴覚療法学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回答率は57.7% (41名/71名)であり、2年生が全体の4割強、1年生が1割弱、3・4年生が2割強を占めていた。通学手段はバイクが3割、自動車が4割、バスが2割で、通学時間は9割が30分以内でした。公共交通機関であるバスの利用が比較的少なく、自らで通学手段を確保する必要性を示していた。

「大学生活について」設問 6～26

約4割が講義以外の時間を学内で過ごすと回答し、次いで、自宅で過ごすのが2割であった。入学後クラブやサークル活動に参加をしているのは3割であった。半数がアルバイトしており、アルバイトをしている場合、最も多い頻度は週に1～3回であった。入学前後に本学のイメージは約6割の学生が変わっていないと回答し、2割強が悪くなったと回答しおり看過出来ない数字といえる。キャンパス内で過ごす場所は講義研究棟が約6割、食堂が約3割を占めていた。休日の過ごし方は6割強が帰省、3割がアルバイトをしていた。学費は6割が親や親族からの援助で、約半数が奨学金を利用していた。学費は8割が親や親族からの援助で、約半数が奨学金を利用していた。一人暮らしが8割で、家族や親戚との同居が2割でした。家族や親戚と同居した場合、生活費は水道光熱費を除いて3万円以下が4割、3～5万円が3割を占めていた。生活費の工面は親などからの援助の割合が高くなっていた。一人暮らしの場合も、生活費は3万円以下が4割、3～5万円が3割を占めていた。工面は親などからの援助が5割を占めたが、奨学金とアルバイトがそれぞれ、3割を占めていた。

好きな講義や実習の数はなしが約半数いて、次いで2～4つが2割を占めていた。大学生活での悩みは、勉強や成績のことで、進路や就職のことが3割、同級生との関係や友人関係が約2割いた。また、悩みの相談の相手は、友人が約半数と最も多く、次いで親・兄弟姉妹等が4割と多くなっていたが、チューター教員への相談が2割に留まった。休学した経験あるいは休学を考えた学生は約1割で、その理由は心身の問題が6割で、学生間の問題と進路への疑問が2割であった。留年経験は約1割があり、その際、心身の支援をして欲しいと答えた。また、退学を考えたのは約1割で、心身の問題と進路への疑問が理由として挙げられた。

「自主学習について」設問 27～29

平日1日の平均勉強時間は30分～1時間が3割で、1時間以上が約半数いた。休日の平均勉強時間は30分未満が過半数で、3割が1時間以上であった。シラバスの内容は、8割強周知していた。

「学科としての対応・改善策」

本学のイメージは学生の9割近くがポジティブに変化しなかった。その理由として、①約半数が好きな講義や実習がないこと、②勉強や成績、進路に関して悩みがあるにも関わらず、2割しか教員が相談相手として選ばれていないことが挙げられる。本学科も他学科同様、臨床実習や国家試験が必須となっているため、授業内容はある程度、決まっている。しかしながら、その教授方法は各教員が工夫でき、より魅力ある授業を展開出来得ると考えられる。学生が復習を自主的に行うような授業の工夫が必要であろう。そのことが、授業への動機付けに相乗的な作用と考えられる。

また、教員が相談相手になれるように、積極的なコミュニケーションを図る必要がある。普段、教員から進んで声をかけるとともに、各教員のオフィスアワーの周知を図り、その時間帯をうまく活用して学生が自主的に、気軽に話せるような環境づくりが大切であろう。

視機能療法学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

アンケートの回答率は1～4年次生が42.5%であった。4年次生の回収率は5.9%であり、全学科中で最低の割合であった。アンケート精度の向上のために、回収率を高める取り組みが必要と考えられた。

通学手段はバイクが29.4%、自動車が52.9%、電車とバスが17.6%であり、通学時間は58.8%が30分以内であった。バイクおよび自動車を合わせると約8割となることから、定期的な交通ルールの確認、交通ルールの順守が必要であると考えられた。

「大学生活について」設問 6～26

講義外の生活サイクルの中心は「アルバイト」が41.2%で最も多く、その頻度は「週に1～3回」が52.9%であった。休日や長期休暇の過ごし方はアルバイトが64.7%で、全学科の中でも最高の割合であった。学費の工面について、「奨学金」が47.1%、「アルバイト」が23.5%であった。

入学前後の大学のイメージは、「変化なし」が64.7%、「悪くなった」が29.4%、「良くなった」が5.9%であった。他学科と比較して、「悪くなった」は最高の割合、「良くなった」は低い割合であった。好きな講義・実習は「なし」が58.8%で、全学科の中でも最高の割合であった。

大学生活の悩みは「勉強や成績」が58.8%、「進路や就職」が64.7%であり、ともに全学科の中で最高の割合であった。悩み事の相談相手は「チューター教員」が5.9%で、全学科の中でも最低の割合であった。留年の経験は「あり」が35.3%で、留年に関わる要望は「学習支援」83.3%であった。退学について、「考えたことあり」は23.5%で、その理由は「学力の問題」または「勉強意欲の喪失」であった。

「自主学習について」設問 27～29

平日および休日の1日平均勉強時間は、「30～60分」が52.9%であった。シラバスの予習・復習の記載について、「知っている」は88.2%で、全学科の中で最高の割合であった。

「学科としての対応・改善策」

当学科の学生は、アルバイトを行っている割合が高く、時間も多い傾向にあり、アルバイトの収入や奨学金を学費に充てていた。学科で検討可能な教育支出（学外実習に関わる費用、教科書代等）については、今後も教育効果に支障のない範囲で削減を検討していきたい。

他学科と比較して、入学前後に大学のイメージが悪化した割合が高く、改善した割合が低い傾向にあった。多くの学生が学習および進路について悩みを抱えている一方で、チューター教員に相談する割合が低い傾向にあった。学習面の問題は、留年または退学につながる第1の要因であることも推測された。学生の悩みの解消から、留年者数および退学者数を減少させ、さらには大学のイメージ回復へとつなげるために、学科では学習面および進路面のケアを一層強化したい。特に、チューターによる学習指導および進路相談をより丁寧なものへと改善したい。

シラバスでの予習・復習の周知は一定の効果を得られており、今後も科目単位でシラバスの周知を実施するとともに、予習・復習の実施状況の確認に努めたい。勉強時間については30～60分が最も多かったことから、勉強時間が増加するよう、学習課題の内容および量を科目単位で見直したい。

臨床工学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

本学科在籍者数 67 名に対して、37 名の回答 (55.2%) と前年度の 7%よりは回収率が向上した。回答した学年もほぼ均等であったため、学科学生のアンケート調査としては有用な結果になったと思われる。通学手段は 83.8%がバイクと自動車であり、これは実習などで帰宅時間が不規則になりがちなためと考えられる。

「大学生活について」設問 6～26

学生は学科内 (8 号棟) で過ごしている者が一番多い (30%)。一方で図書館の利用率は 5%と程度と低い。これは魅力の低さも一因であると思われるが、平日 14%、休日 16%が全く勉強していない、との回答もある (問 27～29) ことから、本学科の学生の一定割合が“資格”を目指す意欲が低いと考えられる。悩みについても、43%の学生が“進路”と回答しており、入学選択におけるミスマッチと学力不足の両面が影響していると推察される。また、相談相手に教員と答えた学生が約 16%と他の学科と比較して低く、好きな講義がないとの学生が 46%と高かった。アルバイトに関して、本学科では生活手段の大事な位置づけの場合を除き、基本的に禁止している。これは、飲食業やコンビニでの就業が翌日の講義・実習に影響していた実例からの提案である。アンケートでは、生活費については大部分の学生が親族からの支援と奨学金と回答している一方で、40%程度の学生が何らかのアルバイトをしており、勉学意欲が低いことを表している。

「自主学習について」設問 27～29

前述のように、平日 14%、休日 16%の学生が“全く勉強していない”と回答しており、当然、シラバスの予復習に関しても意識が低い。今後の国家試験合格率に大きく影響すると思われる。

「学科としての対応・改善策」

1. 教員との関係：女性教員がおらず、40 歳未満の教員もいないことから、20 歳前後の学生たちが相談しにくいことは容易に想像できる。アンケートには無かったが、本学科の退学率は極めて低い。これは学年上下左右関係の良好にするための取り組み (行滕研修、ボランティア活動など) が功を奏して、友人や先輩と気楽に会話相談が出来ているためと考えられる。その一方で、表面に出ていない“問題点”があると仮定して、学科内で情報共有の上に、より丁寧な学生ケアを心掛けていく。

2. 勉学意欲の低さ：“基礎学力不足”の学生が年々増えてきており、リメディアル教育などの時間も増やして学力向上のための対応は行ってきている。一方で教員からの講義での“学びの面白さ”や“資格の魅力”の伝え方が (今の子どもたちには) 難しすぎた可能性も否定できないため、学科内で“伝え方”に関する検討を行っていく。

薬学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回答率は41.7%であり、全学生の平均とほぼ同程度であった。通学手段として60%以上がバイクもしくは車であり、また自転車の学生も10%を越えているため、それぞれの立場における交通ルールの遵守を行う必要がある。また、通学時間60分以上かかる学生が5%いるため、これらの学生に対しては休講連絡および補講・実習の終了時間についての配慮が必要と考えられる。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルの中心は、学内および自宅での自習が60%を越えており、さらにサークル活動もしくはアルバイトを全く行っていない学生がそれぞれ他学科よりも高い結果であった。勉強に集中できるもしくは追われている環境にあると考えられる。一方、休日・長期休暇の過ごし方では、帰省、アルバイト、旅行の順に多く、その期間は勉強から離れてリフレッシュできていることが推察できる。そして、好きな講義・実習については、0と答えた学生が35%であったため、学生が興味を持つような内容や参加しやすい形式の講義・実習となるよう改善が必要と考えられる。さらには学習意欲を向上させるための定期的なイベント・プログラムの導入が必要である。

次に入学前と入学後で本学のイメージが悪くなった学生が24%いるため、具体的な内容およびその要因を明らかにし、その要因についての対策を実施する必要がある。大学全体に対するイメージか学科に対するイメージなのかを明確にすることが重要であると考えられる。また、大学生活の悩みとして勉強・成績が50%と最も多く、勉学に対する悩みの多さが浮き彫りとなった。また、人間関係でも友人、同級生、教員との関係に悩んでいる学生が多い。悩みの相談相手には友達、身内が多いようであるが、誰にも相談しない学生が16%いるため、このような学生のフォローが必要である。退学を考えたことがある学生は23%であり、その理由として学力の問題、経済的問題などがあがっている。

「自主学習について」設問 27～29

平日の1日平均の勉強時間は30分～60分、60分～120分がそれぞれ30%と多かったが、30分未満の学生も20%存在している。休日でも30分未満15%ほど存在することから、この学習時間の短さが悩みのトップ項目である成績や学力の問題に繋がっている可能性が考えられる。

「学科としての対応・改善策」

交通手段として、バイク、車、自転車で通学している学生が多いことから、定期的に交通ルールおよび交通マナーの指導が必要である。そのため、新年度のオリエンテーションで全ての学年に交通安全の指導を行う。通学時間60分以上かかる学生に対するフォローとして、そのような学生が存在すること、終了時間によっては帰宅できなくなることを全教員に認識してもらい、講義・実習の終了時間に学科全体で配慮することとする。

勉強・成績に関する学生の問題については、基礎学力の欠如もしくは学習意欲の低下が原因であると考えられる。現時点での学力と求められる学力に差があることが、半数の学生が勉学に関する悩みを持っていることに繋がっているのであろう。短時間しか勉強しないことが大きな要因であると考えられるため、学生の学習意欲を高めるイベント・プログラムの実施が重要である。そのため、現在行っている薬剤師の仕事説明会やキャリア教育、総合学習などの科目の内容を見直すことを担当教員に提案する。さらに卒業生を招聘し、薬剤師の遣り甲斐や日々の充実感について、学生を含めたSGDを行うイベントを提案する。

経済面で悩みを抱える学生に対するフォローとして、病院および調剤薬局グループが実施している奨学金についてチューターから学生に紹介し、検討してもらおう。ただし、奨学金を受けることになった場合には、就職に制限がかかることを十分に理解してもらおう必要がある。また、悩みについて誰にも相談しない学生、相談できない学生については、ネットを介した気軽に悩みについて相談できるシステムの構築を大学に提案する。

動物生命薬科学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～3

アンケートの回答率が33.0%と全学科の中で最も低かった。学年別の回収率は20.7%～31.1%であり、どの学年も低かった。男24.1%、女69.0%の割合であった。本学科の学生は大半が30分圏内に居住しており(82.8%)、通学手段は、自動車(34.5%)、バイク(20.7%)、自転車(17.2%)、バス(17.2%)であった。

「大学生活について」設問 4～26

講義以外の生活サイクルの中心はアルバイト(44.8%)が最も多く、約7割の学生が実施しており、休日などには約6割の時間を費やしている。図書館での自習並びにボランティア活動は未実施(0%)であった。クラブサークル活動は約6割の学生が週に何回かは実施していた。学費の工面は、親・親戚からの援助(72.4%)が最も多く、奨学金(37.9%)、アルバイト(17.2%)の順であった。本学のイメージは変わらないが79.3%、悪くなったが10.3%であった。一人暮らしが65.5%、生活費は家族と同居等の場合は、3万円未満が60.0%、3～5万円未満は0%であったが、一人暮らしでは3万円未満は42.1%、3～5万円未満が42.1%であった。好きな講義・実習については、2～4つとの回答が最も多く(55.2%)、他の学科と比べて好きな講義・実習が多い傾向であった。大学生活の悩みに関しては、進路や就職(55.2%)、勉強や成績のこと(48.3%)、経済的問題(37.9%)の順であったが、他学科に比して経済的問題の割合が高かった。悩みがある場合の相談は、友達(55.2%)、親・兄弟姉妹等の身内(48.3%)、同級生(20.7%)の順であったが、他の学科と比べて同級生の割合が高かった。休学や退学を考えた学生はそれぞれ、37.9%、17.2%と、休学を考えた学生が他学科に比して高かった。休学を考えた理由は、心身の問題(27.3%)、進路に疑問(27.3%)が多く、退学を考えた理由は進路に疑問(40.0%、n=2)、経済的問題(20.0%、n=1)、教員との問題(20.0%、n=1)、勉学意欲の喪失(20.0%、n=1)であった。

「自主学習について」設問 27～29

平日および休日の1日平均勉強時間は30分未満がそれぞれ44.8%、31.0%、0時間はともに10.3%であった。シラバスの予習・復習の記載については、知っているは75.9%、知らないは17.2%であった。

「学科としての対応・改善策」

アンケートの回答率が少人数の学科にもかかわらず低かったことは、学生への伝達が行き届かなかった点並びにアンケートの意義についてももう少し広報活動をすべきであった。学費の工面においてアルバイトの割合が2割程度あるものの、生活サイクルはアルバイト中心となっている。図書館での自習はなく、1日平均勉強時間は30分未満が多いことから、日常で、学生個々人が大学で学ぶことの意義について考えさせる学習を取り入れる必要がある。さらに、机につくことへの習慣づけとして、科目ごとに1時間程度の宿題を課すことも効果的であるかも知れない。休学を考えた学生が他学科と比べて多いことから、今後、チューター制度を活用した学習指導並びに進路指導をより丁寧にすることを考えたい。

生命医科学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

通学手段として生命医科学科学生 134 名のうち 54%がバイクと車で通学しており交通安全に注意喚起を行う必要がある。また通学時間 60 分以上かかる学生が約 10%おり、これらの学生に対しては実習等の終了時間や自然災害の発生が予想される場合への配慮が必要と考えられる。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルの中心は、学内および自宅での自習が 57%であり、アルバイトを全く行っていない学生が 43%と概ね修学に専念できる環境にあると考えられる。入学前と入学後で本学のイメージが悪くなった学生が 27%いるため、その要因を明らかにし、ネガティブイメージを払拭する必要がある。好きな講義・実習が 2～4 と答えた学生が 46%いた半面、ないと答えた学生が 41%おり、魅力ある講義や実習になるよう改善が必要と考えられる。大学生活の悩みとして勉強・成績 (48%)、進路・就職 (54%)、経済的問題 (18%) が多く、きめ細かなサポートを行う必要がある。また、人間関係でも友人との関係 (16%)、同級生との関係 (9%) 教員との関係 (8%) などが悩みになっている。悩みの相談相手には友達が 58%と最も多く、親族 (親兄弟等) 40%、チューター (17%)、同級生 (16%) となっているが、誰にも相談しない学生が 15%ほどみられ悩みを誰かに相談できる環境整備を考える必要がある。また、休学や休学したいと思ったことがある学生が 21%おり、心身の問題、勉強意欲の喪失、進路に疑問などが理由となっている。退学を考えたことがある学生は 21%で、その理由として勉強意欲の喪失、学力問題、心身の問題があがっている。留年したことがある学生は 10%で、経済的支援や学力の支援を学校に求めている。

「自主学習について」設問 27～29

平日の一日平均の勉強時間は 30 分～120 分 (約 60%) が多いものの 30 分未満・全くしないが 22%ほど占めている。休日でも 30 分未満・全くしないが 15%ほどみられ、学力低下の原因になっている可能性がある。

「学科としての対応・改善策」

学生の半数が車やバイクで通学しており、入学時のガイダンス等で交通安全の指導を強化する。また、通学に長時間を要する学生に配慮して、実習時間の効率化や、自然災害時の休講等を早め周知する。

学生の問題や悩み (勉強・成績、進路・就職、経済的問題) についてチューターを中心に学科全体で対処しているが、中途退学の予兆を捉え、学生の主体性とモチベーションを醸成することが今まで以上に必要となってきた。学業、対人関係、抑鬱や不安など、学生のさまざまな悩みに対応し、悩みを抱え込んだまま退学や除籍に至るのを防ぐことが重要になってくる。これらの問題の対応・改善策として、①教職員と保護者との連携の強化、学生の修学面と生活面を常に学科教員間で共有、保護者へ学修状況の通知、定期的な学科主催の保護者懇談会の実施、学生課・保健管理センターとの連携体制を確立する。②円滑に修学を進めるための対応・改善策として、入学前のロジカル・コミュニケーションや e-ラーニング教育、初年次教育や演習形式の授業 (ゼミナール) の積極的な導入、入学後にコーチング・フォローの徹底化を図る。③エビデンスに基づいた「早期支援システム」を基盤に PDCA サイクルを強化しながら、学生相談のアカデミックアドバイザー教員 (インターカー) の設置や CP と DP との一貫性を持ったエビデンスに基づいた学生指導を実施する。さらに、アクティブラーニング型授業を推進・強化する。④セーフティーネットとして、出席を促す「センサー科目」と「演習 (ゼミ) 科目」の設定や休学と退学リスクの高い集団を抽出する IR (Institutional Research) を利用する。問題のある学生を早期に発見し、その対策を提供できる仕組みを作る。「マンツーマンの指導」を行い、学生に十分な充実感、達成感、満足感を与えるとともにアドバイザー教員がチューターと協働してサポート体制に厚みを持たせる。